

LETTER TO THE JAPAN CHAPTER OF THE AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS	P1
ACS Honorary Fellowship をいただ いて	P2
医療安全そして考える外科学	P3
American College of Surgeons (ACS) に再任されて	P4
新入会員になって	P5
アメリカ外科専門医資格	P6
心臓外科フェロシッから経験した 事	P7



ACS日本支部ニュース

NEWSLETTER FROM THE JAPAN CHAPTER
OF AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS



ACS会長

LETTER TO THE JAPAN CHAPTER OF THE AMERICAN COLLEGE OF SURGEONS

コートニー・M・タウンゼント.Jr.

Courtney M. Townsend, Jr., MD, FACS, President of the American College of Surgeons

*Professor and Robertson-Poth Distinguished Chair in General Surgery in the Department of Surgery
at the University of Texas of Texas Medical Branch in Galveston.*

As President-Elect of the College, I was privileged to attend the 116th annual meeting of the Japanese Surgical Society and ACS chapter in Osaka. My wife Mary accompanied me. We made many new friends and loved seeing the cherry blossoms and exploring Osaka.. This year as President of the College, I am doubly privileged to attend the 117th meeting of both JSS and ACS chapter as well as the breakfast meeting of the Japan Association of Women Surgeons. Mary and I look forward to renewing friendship and getting to know Yokohama.

The Japan chapter is the second largest international chapter and an important force for progress in Surgery for inspiring quality, safeguarding highest standards to ensure better outcomes. Quality and Education are the foundations of the College. I would like to highlight two examples in Japan.

First, development of the National Clinical Database(NCD) in collaboration with the ACS-NSQIP. Through this collaboration, it was demonstrated that local risk models are essential for quality improvement.

Second, the Advanced Trauma Operative Management course (ATOM), first offered in Japan in 2008, is now available in 6 centers. The Japan Board of Surgery recognizes the importance of the course and awards 4/10 trauma points toward certification to residents who successfully complete the course. These are but two of many examples of how the Japan chapter elevates the standards of surgery.

I would like to congratulate the 32 Japanese surgeons who were initiated into Fellowship at the Clinical Congress in 2016. I am excited to attend the meetings this year, meeting old and new friends and learning from my surgical colleagues in Japan.

略歴

Dr. Courtney M. Townsend, Jr., President of the American College of Surgeons 2016-2017, has received awards and honors which include Research Career Development Award, NIH, 1982; Ashbel Smith Distinguished Alumnus, 1986, UTMB; James IV Surgical Traveller for 1986; President, American Pancreatic Association, 1992-1993; ACGME Residency Review Committee for Surgery, 1994-1999; James IV Association of Surgeons, Inc., Board of Directors, 1999-2002; Texas Cancer Council Member, 1992-2010; Director, American Board of Surgery, 2000-2006; Chairman, American Board of Surgery, 2006-2007; American College of Surgeons Board of Governors Executive Committee, 1999-2003; Chairman, American College of Surgeons Board of Governors, 2004-2005; Secretary, American College of Surgeons, 2006-2013; Secretary, Southern Surgical Association, 1998-2003; President, Southern Surgical Association, 2004; President, American Surgical Association, 2007-2008; Chair, American Surgical Association Foundation, 2013-2014.

Dr. Townsend was John Woods Harris Distinguished Chairman, June 1995-October 2014, and is currently Professor and Robertson-Poth Distinguished Chair in General Surgery in the Department of Surgery at the University of Texas Medical Branch in Galveston.

Dr. Townsend is Editor-in-Chief of the Sabiston Textbook of Surgery: The Biological Basis of Modern Surgical Practice, for the 16th, 17th, 18th, 19th and 20th editions. He is on the Editorial Advisory Board for The American Journal of Surgery and Deputy Editor for the Journal of the American College of Surgeons.



学校法人福岡学園理事長
九州大学名誉教授

水田 祥代

Sachiyo SUITA, M.D., Ph.D., FACS, FAAP(Hon), Professor Emeritus, Kyushu University (2008-)

Executive Trustee, Fukuoka Dental College(2012-)

2016年度のACS Honorary Fellowshipをいただきました。

2015年1月にACS Women in Surgical Committee委員である東京慈恵会医科大学外科の川瀬和美先生よりACS Honorary Fellowshipに推薦したいのでCVを送れというメールをいただき、まさかそんな立派な称号をいただけるわけがないと思ながらも送りました。また、ACS日本支部長の東京慈恵会医科大学矢永勝彦教授からもサポートしてくださるとのご連絡をいただきました。

その後11月16日付けでACS Executive DirectorのDr. David HoytからHonorary Fellowshipに決まったこと、10月16日のConvocationで授与されること、Presenterをどなたにお願いするか、ガウンの用意のために身長と帽子のサイズを知らせなさい等々メールが次々にやってきました。大変名誉なことですし、嬉しかったのは事実ですが、10月16日に出席できるかどうか心配でした。実は2016年10月21-23日に私は第23回日本歯科医学会総会を会頭として福岡で主宰することが決まっていたからです。これは医科における日本医学会総会に匹敵するもので、4年に1回開催される歯科界では最大で最重要な学会です。実際には10月19日からいろいろな行事が入りますので、逆算して14日出発、15日President's Dinner、16日のCONVOCATIONに出席、17日のOpeningと18日のGovernors Dinnerへは欠席(17日の飛行機に乗っても福岡につくのは18日の夜です)ということでACSには了解をいただき、3泊5日のワシントン往復の旅へと出発しました。ACSの会合には3回ほど出席したことがありますが、Honorary Fellowshipとなりますとずっと重みが違いました。Convocationの雰囲気

の豪華なこと、ガウンを着て壇上に上がり、5人の候補者はそれぞれのPRESENTORによって紹介され、(私はミシガン大学小児外科名誉教授であり、若いころからの友人であるA. CORAN教授にお願いしました)、会長さんから賞状を渡され握手をしました。終わってもガウンをぬぎたくない気持ちでした。走り回った3泊5日で、ゆっくり講演を聞くこともできず、残念でしたが、歴史ある学会のFellowshipに推薦されたことはとても名誉なことでした。私がこんな立派な賞をいただくに値するかどうかは別として、九州大学医学部卒業50周年目にいただいたことは、大学卒業後ずっと小児外科一筋に頑張ってきたことへのご褒美と思っています。川瀬先生、矢永先生をはじめご尽力いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

私は数えの6歳の時に麻疹から中耳炎になり、戦後の何もなく時代九州大学付属病院に入院して以来、「大きくなったらお医者さんになること、それも九州大学で勉強すること」が夢でした。念願の九州大学医学部で学び、何科を専攻するにしても子どもに関することをとっていました。どの科も魅力的に思えて迷いました。しかし、実は外科だけは選択肢に入っていませんでした。講義で手術の映画を見る時、メスがスーッと血の筋を作っていくのを目にしたとたん気分が悪くなって倒れ、先生に『だから女子学生は嫌いだ!』と嘆かれるような有り様でした。その、まさかだった外科を選ぶことになったのは、立川米空軍病院でのインターン時代、腸閉塞症による腹痛に身をよじらせていた若い兵士が術後に見せた笑顔の素晴らしさに惹かれて外科、特に子どもの外科を勉強したいと思うようになりました。「バカな!何を好んで外科医などに!」「女に

手術してもらいたいと思う人はいない」と言う多くの反対の中で、「本当に自分がやりたいことを力一杯しなさい」と言ってくれた両親や、「やってみなければダメかどうか分からないじゃないか。やってみてどうしても無理なら、その時また一緒に考えよう」と言って下さった恩師井口潔教授に励まされて、九州大学第二外科の大学院へ入学しました。

大学院1年生の時に、縁あって1968年から2年間、英国リバプール大学で小児外科のトレーニングを受け、この間1200例もの手術例を経験しました。毎日がハードな2年間でしたが、この2年間の留学は私の小児外科医としての原点となりました。1979年、九州大学に国立大学で初めての小児外科学講座が開設され、講師に昇進し、医局長を務めました。その後福岡市立子ども病院小児外科部長を経て、1989年に、九州大学教授(小児外科学講座)に就任し、たくさんの病める子どもの治療とともに、多くの小児外科医を育成しました。現在、我が国の国公立大学の11人の小児外科学教授のうち、5人が私のもとでトレーニングを受けました。彼らは私のもとで学んだことをさらに次の世代の若い人たちにへと伝え、小児外科学の輪を広げていってくれております。私にと

りましてこれほど嬉しいことはありません。

2004年、九州大学病院長に就任し、「患者さんが満足し、医療人も満足する病院でありたい」という理念のもと病院の改革に努力しました。丁度国立大学が法人化した時で、大変でしたが、とてもやりがいがあり、楽しく充実した毎日でした。2008年から九州大学の副学長・理事として財務、国際、男女共同参画等を担当し、2010年に九州大学を定年退職後は学校法人福岡学園理事として、そして2015年からは理事長として学園の運営に携わるとともに、口腔医学の発展をもとめて、「歯学から口腔医学」を提唱し、従来の歯学に一般医学・福祉の要素を取り入れたより総合的な口腔医学教育を実践し、「口腔の健康を通して全身の健康を守る歯科医師」の育成に努力しております。

この50年間、多くの良き師、良き友に恵まれ、子どものころからの夢であった医師として子どもたちと接しながら、時代とともに変化していった医学・医療の進歩発展を実感することができた毎日がとても充実した時間であったことに感謝するとともに、現在も福岡学園で進歩していく教育、診療、研究の最前線を感じるができることは幸せだと思っております。

略歴

1966年4月～1967年3月
1968年3月～1970年2月
1973年4月～1974年3月
1974年4月～1979年10月
1979年11月～1983年9月
1983年10月～1986年3月
1986年4月～1989年8月
1989年9月～2004年3月
2003年4月～2004年3月
2004年4月～2008年3月
2008年4月～2008年9月
2008年10月～2010年9月
2010年10月～2011年7月
2011年8月～2015年2月
2015年3月

米空軍立川病院にてインターン
英国リバプール大学付属小児病院医師
九州大学医学部付属病院医員(第2外科)
九州大学医学部付属病院助手(第2外科)
九州大学医学部付属病院講師(小児外科)
福岡市立子ども病院外科部長
九州大学医学部助教授(小児外科学講座)
九州大学医学部教授(小児外科学講座)
九州大学評議員(併任)
九州大学病院長、教授
福岡歯科大学客員教授
九州大学理事・副学長
福岡歯科大学理事
学校法人福岡学園・福岡歯科大学常務理事
同上理事長就任、現在に至る。

ETHICON
PART OF THE Johnson & Johnson FAMILY OF COMPANIES

より綺麗なステイプル形成を目指して

GST SYSTEM

Powered
ECHELON FLEX® GST® System



製造販売元:ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカルカンパニー 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号 TEL (03) 4411-7905
管理医療機器 販売名:エンドスコピック パワード リニヤー カッター 認証番号:22500BZX00396000
高度管理医療機器 販売名:GSTカートリッジ 承認番号:22700BZX00155000

ETHD0470-01-201602 ©J&JKK 2016



群馬大学大学院 総合外科学 教授

桑野 博行

Hiroyuki Kuwano, M.D., Ph. D., FACS

Professor and Chair Department of General Surgical Science Graduate School of Medicine, Gunma University

医療安全そして考える外科学

この度、第117回日本外科学会定期学術集會を2017年4月27日～29日に横浜にて開催させていただくことになりました。日本外科学会は毎年ACSとの交換プログラムを行っていますが、今回の学術集會では、ACS Presidential LectureをDr. Courtney M. Townsend, Jr.にお願いしています。また、ACS前会長であるDr. Carlos A. Pellegriniは今回、日本外科学会名誉会員に推挙され、名誉会員授与記念講演をお願いしています。

外科学分野の進歩は目覚ましく、エネルギーデバイスなど新たな手術機器の開発や、三次元画像構築などによる画像診断、ハイビジョンや3D立体映像提示装置による鏡視下手術、ロボット手術など新たな技術が次々と導入されています。さらに次世代シーケンサーの登場によりDNA-塩基多型や遺伝子の転写に影響するエピゲノム、mRNAなどの解析が可能になり、膨大な量のゲノムデータいわゆるビッグデータの時代をもたらしています。ビッグデータの解析は、他のオミックス研究や臨床試験、患者記録からのビッグデータにも関心がひろがり、外科分野におけるNCD (National Clinical Database)、JACVSD (日本成人心臓血管外科手術データベース)、がん登録システムなどの大規模データベースの活用がすすめられ、新知見を得ることが可能になってきています。

一方、医学の進歩、新たな医療技術、

機器の進歩に対し、私たちはその恩恵を享受するとともに、その利便性と裏腹にそれらの「リスク」にも目を向ける必要があります、改めて安全な外科医療の提供に努めていかなければならないと考えております。第117回日本外科学会定期学術集會では、医療安全の問題をより重視する立場からメインテーマを「医療安全そして考える外科学」とし、3日間にわたり医療安全のセッションを企画させていただいています。群馬大学医学部附属病院 医療事故調査委員会報告書の提言は、「これまで我が国の医療界では議論が不足していた『日常診療の中に標準から逸脱した医療が登場した場合、それを早期に発見し、より安全な医療へと是正する自浄的な取り組みをするにはどうすればよいか』という命題に対し、医療界の叡智を集めて解決することが求められる。そして、まさに近い将来、その命題に対し、『群大病院に学ぶ』として、多くの医療機関の改革が実現して行くことを期待する。」として結ばれています。本件を受け、医療安全の問題に対して正面から取り組む所存でございます。

さて、近年は研究開発費が削減され、基礎研究よりも成果に結びつきやすい開発研究を重視する傾向がありますが、一方、先日オートファジーの研究でノーベル生理学・医学賞を受賞された東京工業大学の岡野栄誉教授は、「役に立つ」という言葉が、とても社

会をダメにしていると思う。本当に役にたつのは、10年後か20年後か、あるいは100年後かもしれない。社会が将来を見据えて科学を一つの文化として認めてくれるようにならないかと強く願っている」と述べておられます。経済学者の小泉信三氏のことばには、「すぐに役に立つものはすぐに役に立たなくなる」とあります。医学研究において、「役に立つか否か」と「無駄であるか」は全く別問題であります。一見役に立たないようにみえるものの中に、キラリと光るもの、「真実」を見いだすべく、「考える」姿勢が求められています。トランスレーショナル・リサーチは、基礎から臨床へ展開する「一方向」だけではなく、外科医、臨床医から臨床の課題を基礎研究に展開する「双方向」的な視点が重要であり、臨床のなかであっても能動的に「考える」必要があるのではないで

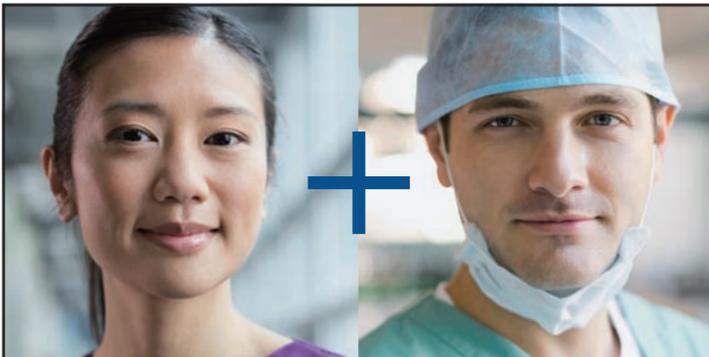
しょうか。

そこで、学術集會のメインテーマの一つ「考える外科学」は私共が通常、当然のこととした前提として未だ本質的議論をすることなく、所謂「置きざり」にしていたような命題を正面から捉え、さらには事象の本質に迫り、今後の方向性を見通すようなテーマを真剣に考えてみようという試みです。是非本学術集會にご参集いただき、活発なご議論をいただき今後の医学、外科学の将来を考える端緒としていただければ幸いです。

第117回日本外科学会定期学術集會が、実りのある、そして全国から足を運んでいただいた先生方にとって心に残る学術集會となるよう、教室員総力を尽くして本学術集會を開催させていただき所存でございます。多くの皆様にご参集していただきますよう心から御願い申し上げます。

略歴

1978年6月1日	九州大学医学部附属病院医員 (研修医)
1984年4月6日	米国ハーネマン大学医学部外科 Assistant Professor
1986年3月1日	九州大学医学部助手 (外科学第二講座)
1994年1月16日	九州大学医学部附属病院講師
1997年8月16日	九州大学医学部助教授
1998年5月1日	群馬大学医学部教授 (外科学第一講座)
2003年4月1日	群馬大学大学院医学系研究科 教授 (医科学専攻臓器病態制御系腫瘍制御学講座 病態総合外科学専攻分野)
	現在に至る
2015年4月1日	群馬大学医学部附属病院外科診療センター長
2017年4月1日	群馬大学大学院総合外科学主任教授

**INNOVATING WITH
PATIENTS AND
PROVIDERS
IN MIND**

より良い医療の実現を目指して

Further, Together
共に医療を次のレベルへ

コヴィディエン ジャパン株式会社

medtronic.co.jp

Medtronic



American College of Surgeons (ACS) に再任されて

東京慈恵会医科大学外科学講座消化器分野

矢永 勝彦

Katsuhiko Yanaga, MD, PhD, FACS

2013年11月より任期3年でAmerican College of Surgeons (ACS) のGovernorを拝命いたしておりましたが、ACS本部より二期目のご下命をいただきました。引き続き大変名誉な役職を担当させていただくこととなり、日本支部の役員の方をはじめ、皆様のご支援のおかげと深く感謝いたします。

ご存じの通り、ACS日本支部はACSと日本外科学会の交流・連携を促進することを目的に立ち上げられました。支部会費をお支払いいただいているactiveな会員数のみでも287名と世界的に見てメキシコ、インドに次ぎ大きな支部です。また近年のInitiates (新任のfellow) 数が

2013年27人、2014年32人(第2位)、2015年24人(第4位)、2016年32人(第3位)と更に増加しています。これもひとえに歴代のGovernor、支部長、Secretary、Councilor、ならびに日本支部会員のフェローの皆様のご尽力の賜物と感謝いたします。

わが国のGovernorは初代の藤井功一先生以来、桜井健司先生、故出月康夫先生、山川達郎先生、谷川允彦先生と受け継がれ、私が第6代となります。ACSと支部の双方向の連絡係としてのGovernorの役割を残る3年間、誠心誠意努めさせていただきますたく存じますので、日本支部会員の皆様におかれましては、今後

も何卒よろしく申し上げます。

最後にACS日本支部の会員の皆様の益々のご健勝を祈念いたします。



ACS President Prof. Courtney M. Townsendと (2016年10月18日、Washington DCにて)

略歴

- 1979年3月 九州大学医学部医学科 卒業
- 1979年6月 九州大学医学部附属病院研修医 (第二外科)
- 1980年7月 米国ハーネマン医科大学・関連病院レジデント (一般外科)
- 1983年8月 大分赤十字病院医員 (外科)
- 1986年4月 九州大学医学部附属病院助手 (第二外科)
- 1986年7月 米国ピッツバーグ大学医学部附属病院 クリニカル・フェロー (外科)
- 1988年1月 米国ピッツバーグ大学医学部客員助教授 (外科)
- 1989年11月 九州大学医学部講師 (第二外科)
- 1998年4月 松山赤十字病院部長 (外科)
- 2000年4月 長崎大学医学部講師 (第二外科)
- 2003年4月 東京慈恵会医科大学外科学講座教授 (消化器外科分野) 現在に至る

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

高周波を、意のままに操る

STMSが、手術を変える

エネルギーデバイスの新時代を拓く

切開 止血 封止 把持 剥離

製造販売元: オリンパスメディカルシステムズ株式会社
販売名: サージカル ティッシュ マネージメント システム 医療機器番号: 22500BZX00335000
販売名: 高周波焼灼電源装置 ESG-400 医療機器番号: 22500BZX00336000

Surgical Tissue Management System
STMSは1台で、THUNDERBEATや様々な高周波処置器具が使用可能。手術のあらゆるシーンに創造と変化をもたらします。

オリンパス株式会社 www.olympus.co.jp

抗悪性腫瘍剤 抗ヒトEGFR^{※2} モノクローナル抗体 薬価基準収載

アービタックス® 注射液 100mg

セツキシマブ (遺伝子組換え) 製剤
生物由来製品 劇薬 処方箋医薬品^{※1}

ERBITUX®
CETUXIMAB

● 効能又は効果、用法及び用量、警告、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

製造販売元
メルクセローノ株式会社 | 〒153-8926 東京都目黒区下目黒1-8-1 アルコタワー
[資料請求先] メディカル・インフォメーション (TEL) 0120-870-088

アービタックスおよびERBITUXはイムクロン エルエルシーの商標です。

Merck Serono Merck Serono is a business of Merck **MERCK**

2015年5月作成



新入会員になって



川口市立医療センター 小児外科

黒部 仁

Masashi Kurobe, MD, FACS

この度、2016年10月に Washington D.C.にて開催された第102回 Clinical Congressにて正式に Fellowとして承認を頂き、大変光栄に思います。ご推薦を頂きました諸先生方にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

自分が初めて Clinical Congressに参加したのは2002年 San Franciscoで開催された第88回でした。当時、母校の外科に入局後、その中で小児外科医としての training に励んでいましたが、小児外科班からは、Children's Hospital of Philadelphia と UCSF Fetal Treatment Center の2か所が海外留学先として派遣が開始されたばかりで、自分にチャンスがまわってくるにはまだ時間がかかる状態でした。そんな中、UCSF Fetal Treatment Center の Dr. Michael Harrison のもとにいた Dr. Craig Albanese が Stanford 大

学の小児外科 chief として移動するという情報を得たため、UCSF に留学していた先輩医師を伝手に第88回 Clinical Congress に参加し、学会会場内を歩き回って Dr. Albanese を探しだし、留学の願いを直談判しました。奇跡的にも何時でも welcome と返事を頂き、2003年から約2年間の留學生活が始まりました。留学中のクリスマス休暇の時に Washington D.C. を訪れたことがあり、家族4人で雪の中、National Christmas Tree の周りを歩いたことをついこの前の様に思い出されま。その時にはまさかこの場所で Fellow になれることなど、全く想像していませんでした。

その後も Clinical Congress に参加する毎にどうしたら Fellow になれるのか、どうしたら Fellow に相応しい外科医になれるのかを考えてきました。今回、今まで大変お世話に

なった諸先生方から貴重なご推薦を頂き、Convocation Ceremony に臨むことができました。ガウンを着て一緒に歩く外科医の表情は自信と誇りと感激に満ちあふれていました。Ceremony の中で、日本の小児外科医の大先輩であられる九州大学の水田祥代先生の Honorary Fellowship の授与があり、Initiates 代表者の心温まる speech があり、そして、Initiates 全員で Fellowship Pledge

を読み上げました。この様な大変厳かな雰囲気の中、今まで自分をサポートしてくれた家族やこの場所に導いてくれた諸先生方への感謝の気持ちと、日本人小児外科医としての誇りと Fellow としてのその重さ、責務を常に忘れてはならないと改めて感じました。

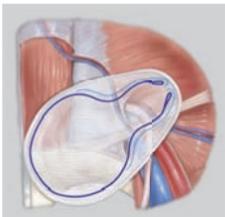
今後も College を通して外科臨床を勉強する次第です。ご指導・ご鞭撻のほどをよろしくお願い致します。

略歴

1992年	東京慈恵会医科大学 卒業
1992年～1994年	日本赤十字社医療センター 外科研修
1994年～1997年	東京慈恵会医科大学 外科
1997年～1999年	国立成育医療研究センター (旧 国立小児病院) 本名外科
1999年～2002年	川口市立医療センター 外科
2002年～2003年	東京慈恵会医科大学 外科
2003年～2005年	スタンフォード大学 小児外科 Postdoctoral Research Fellow
2006年～2008年	東京慈恵会医科大学 外科
2008年～	川口市立医療センター 小児外科
2017年～	同センター 小児外科部長

BARD® ONFLEX®

バード® オンフレックス®
鼠径ヘルニア修復用メッシュ



Same proven technique.

- 従来品®と同様の腹膜前修復法での使用が可能。

Improved mesh.

- ライトウェイト、ラージポアメッシュ、吸収性リコイルリングを採用。
- 腹膜前腔で鼠径部の解剖にフィットしやすいデザイン。

※バード® クーゲル® パッチ、バード® ダイレクト クーゲル® パッチ、バード® ポリソフト®

※事前に必ず添付文書を読み、使用目的、禁忌・禁止、警告、使用上の注意、貯蔵・保管方法及び使用期間等を守り、使用方法に従って正しくご使用下さい。本製品の添付文書は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)の医薬品医療機器情報提供ホームページで閲覧できます。
※製品の仕様・形状等は、改良等の理由により予告なく変更する場合がございますので、あらかじめご了承下さい。
※Bard, バード, ONFLEX, オンフレックス, クーゲル, ポリソフトは、C. R. Bard社の登録商標です。

製造販売業者：株式会社メディコン 本社 大阪市中央区平野町2丁目5-8 ☎06(6203)6541(代) <http://www.medicon.co.jp>

慣れた術式で、磨き上げられた製品を。



バード® オンフレックス®
(オリジナルタイプ)

バード® オンフレックス®
(モディファイドタイプ)

BARD
株式会社 **メディコン**

販売名：バード オンフレックス
承認番号：22800BZX00298000
クラス分類：[4] 高度管理医療機器
一般的名称：吸収性ヘルニア・胸壁・腹壁用補綴材
償 還 区 分：繊維布・ヘルニア・形状付加

ヘルニアに関する情報が欲しい!と思ったら
メテ助 medisuke.jp
にご登録ください。



Brigham and Women's Hospital 心臓外科

金子 剛士

Tsuyoshi Kaneko, Assistant Professor,
Department of Surgery, Harvard Medical School

現在日本では専門医制度の改革が議論を呼んでいるようですが、本日はアメリカの外科専門医制度 American Board of Surgery (ABS) について紹介させていただきます。

まず受験資格ですが、第一に American Council for Graduate Medical Education (ACGME) から認可を受けた特定の外科レジデンスプログラム（5年間）を卒業し、「専門医受験資格」を取得する必要があります。それぞれの外科レジデンスプログラムは ACGME の認可を受けるため5年ごとに行われる実地調査をクリアする必要があります。特定の分野で施設の最低必要症例数に満たない場合や、自習時間の確保、Work Hour の超過、アテンディングへのフィードバックの機会等規定されている必要条件が満たされていないと判断された場合は1年での再審査、最悪の場合認可取消が行われ、非常に厳しく管理されています。第二に日本の外科専門医と同様、必要執刀症例数が定められており、5年間で750例以上、チーフレジデントとして150例以上指導することが条件となっています。更に細かく分野ごとの最低症例数が設定されており、余り日本では多くない外傷外科、熱傷手術、形成外科での必要症例数、また集中治療室で担当した25例の提出も義務付けられており、卒業時に一人前の“一般”外科医となれることに主眼が置かれています。またチーフレジデント

時にジュニアレジデントの前立ちとして25例執刀することも最低症例数に含まれており、教育に重点をおいているアメリカらしい条件となっています。第三に Advanced Cardiovascular Life Support (ACLS), Advanced Trauma Life Support (ATLS) そして Fundamentals of Laparoscopic Surgery (FLS) と3つの資格取得が必須となっています。ACLS と ATLS は認定コースに参加することで資格を取得できます。FLS は2010年から開始された腹腔鏡認定の試験で、筆記試験及び実技試験 (peg transfer, precise cutting, loop ligation, extracorporeal knot tying, intracorporeal knot tying) から構成されています。2017年から同様の内視鏡の筆記及び実技試験である Fundamentals of Endoscopic Surgery が必要資格に追加されることになっており、時代に合わせて必要なスキルを資格に加えることで対応しています。認可レジデンスプログラムでの卒業及び上記必要資格取得で、晴れて専門医試験の受験資格を取得します。

専門医資格取得後、まず始めに Qualifying Exam (QE) と言う250問4時間の筆記試験を受験します (合格率80%)。このQEに合格すると最終試験である Certifying Exam (CE) の受験資格を得ることになります。(合格率70~80%) これはホテルの一室で行われ、30分間のセッションを3つ受けることとなります。各セッション

は3~4のシナリオが用意されており、年配の Senior Surgeon と新進気鋭の Junior Surgeon が試験官となります。シナリオには大抵合併症や確実な正解のない症例を提示され、外科医としていかに安全にかつ迅速に対応できるかが問われます。知識だけではなく、答え方や仕草などの駆け引きも非常に重要なため、CE/QEともに直前の集中講習が行われ、多くのレジデントがこのようなコースに参加することが一般的になっています。各プログラムごとのQE/CEの合格率は毎年オンラインに一般公開されるため。各プログラムは合格率を上げるために様々な努力と工夫をすることになります。

このように様々な工夫を凝らしているABSですが、近年いくつかの問題が指摘されています。最も頭を悩めているのがフェローシップとの関係です。一般外科の細分化により、外科レジデンス卒業後8割以上が心臓外科、

肺外科、血管外科、形成外科、乳腺外科、直腸外科や腫瘍外科などのフェローシップに進みます。そして大きい病院・プログラムであるほどフェローシップが各分野に渡り存在するため、レジデントの執刀機会を奪っています。その為、さらに専門分野でのフェローシップを追及する人が増えていく悪循環が起こっているわけです。またフェローシップを行った自分の専門分野での専門医こそが重要で、ABSが形骸化しているのではないかとということが問題視されています。このような問題に対して、ABSをフェローシップ専門医の必要条件にすることで対応してきましたが、近年心臓外科、肺外科そして血管外科の専門医ではABSが必要条件では無くなって来たため、この分野での外科医のABS取得率が減少しています。今後、どのような改革をABSが行っていくのか日本と同様に注目されています。

略歴

2002年	慶應義塾大学医学部卒業
2002~2005年	慶應義塾大学病院外科入局
2005~2006年	慶應義塾大学病院心臓外科入局
2006~2007年	New York Medical College Bronx Program 一般外科レジデント
2007~2011年	University of Texas at Houston 一般外科レジデント
2011~2014年	Brigham and Women's Hospital 心臓外科フェローシップ
2014~2016年	Brigham and Women's Hospital 心臓外科スタッフ Harvard Medical School Instructor
2016年~	Brigham and Women's Hospital 心臓外科スタッフ Harvard Medical School Assistant Professor



私たちは人びとの健康を高め
満ち足りた笑顔あふれる
社会づくりに貢献します。



大鵬薬品工業株式会社
TAIHO PHARMACEUTICAL CO., LTD.
<http://www.taiho.co.jp>



心臓外科フェロシップから経験した事



ピッツバーグ大学 心臓胸部外科 インストラクター

香川 洋

Hiroshi Kagawa, MD, PhD

現在、多くの若手心臓外科医が海外臨床留学を経験しており、様々な情報や経験談がありますが、今回は私がアメリカでの臨床留学で経験した事が少しでも参考になればと思い紹介させていただきます。

そもそも私は学生時代はそれ程留学思考は高い方ではなく、ECFMGの勉強も特にしておりませんでした。ただ、私が在籍していた慈恵医大はイギリスの医学校と提携しており、毎年交換留学生を派遣しておりました。私は大学6年生の時に運良く交換留学生に選ばれ、イギリスの病院で3か月実習をさせて頂きました。また、卒後研修をアメリカ式の研修方式を取り入れた病院で受けました。これらの事がその後のアメリカ留学の動機付けになったのではないかと思います。

私は、大学院を修了後、卒後7年目に研究目的にスタンフォード大学で留学を開始しました。留学を開始するには受け入れ先を探すことは大変ですが、一回留学を開始して、アメリカのシステムに入り込めば、その後の更なるステップアップのための施設探しは、アメリカ人からの推薦状がもらえるので少しは楽になります。私の場合はツテやコネも無く、アメリカ人の推薦状も無く、ECFMGも無かったので受け入れ施設を探すのは苦労しましたが、幸いにも受け入れ先が見つかり研究留学を開始しました。その後、ラボの同僚に影響されECFMGを取得し、

臨床留学へと移行しました。

私が専攻している心臓外科の分野では、アメリカ人の正規フェローの数は制限されていますが、彼らだけでは当直も回せず、手術もカバーできないので、多くの外国人が一般外科のレジデンシーを経ずに、心臓外科のフェロシップに入り込んでいます。ただ、これらの人にはアメリカの専門医の受験資格はありませんが、多くの心臓外科手術が経験できるというメリットがあります。また、正規のアメリカ人フェローよりそこそこの経験のある外国人フェローを好むアテンディングすらおり、フェロシップからの留学にも大いに価値があります。私が臨床留学をしている時は、正規のアメリカ人フェローがクビになるのを目の当たりにしましたし、難しい症例の時にあえてアメリカ人フェローではなく私が手術に入る様に指名されたり、チーフフェローを経験させてもらうなど、非正規フェローでも、アテンディングに信頼される様になれば正規フェローと同等の経験をする事が出来、非常にやり甲斐があります。

アメリカへの臨床留学の目的は多くの症例を経験する事だと思いますが、それと共にまだ日本では一般的ではない手術等を経験する事も挙げられます。また、日本とアメリカの医療システムの違い、多くの専門職の存在等を知る事も良い経験になります。多くの専門職が存在するおかげで外科医は手

術に集中する環境が整っています。ただ、その分、チーム内のコミュニケーションが非常に重要になります。

臨床留学をする際に一番大事なことは日本との繋がりだと現在は考えております。留学をして、ある程度の経験を得た後は日本に帰るのか、それともアメリカに残るのか、というのが最大の問題です。もし日本に帰るのならどこに帰るのか、どの様に施設を探すのか、自分のアメリカでの経験を還元する施設はあるのか、などの問題があります。アメリカで心臓外科のトレーニングを受けた人が日本に帰らず、そのままアメリカに残っているケースが最近増えている印象があります。やはりアメリカでは手術に集中できる環境が整っている事等に魅力がある事もありますが、日本に帰っても自分の経験を還元できる施設が少ないことが多く影響してい

るのではないかと感じています。

日本の外科成績はアメリカの成績に比べ、劣っているところか、少なくとも同等か、分野によっては日本の方がはるかに優秀な場合も多々あります。しかし、アメリカの医療を経験することによって、日本の医療のどこが良く、どこを修正すべきかがはっきりと目に見えてきます。これらの視点を得ることもアメリカ臨床留学の意義のひとつであり、今後の若い人にも臨床留学をどんどん経験してもらいたいと思います。

最後に、留学にあたり色々サポートをしていただいた慈恵医大心臓外科の橋本教授、医局員の先生方に感謝させて頂くと共に、このような投稿機会を与えていただいた吉田先生にも御礼申し上げたいと思います。

略歴

- 2003年 東京慈恵会医科大学 卒業
- 2003年 聖路加国際病院 外科系研修医
- 2005年 東京慈恵会医科大学 心臓外科
- 2009年 東京慈恵会医科大学 大学院博士課程修了 医学博士
- 2010年 Stanford University, Cardiothoracic Surgery Post-doctoral Scholar
- 2013年 Northwestern University, Cardiac Surgery Fellow
- 2014年 Emory University, Cardiac Surgery Fellow
- 2016年 University of Pittsburgh, Cardiothoracic Surgery Instructor

新薬が生まれる。
世界が変わってゆく。

すべての革新は患者さんのために

創造で、想像を超える。

CHUGAI 中外製薬

Roche ロシュグループ



事務局便り

本号では、昨年、大阪で開催された外科学会定期学術集会の際に日本支部年次総会でもご講演いただいた ACS 現 President の Townsend 先生からご投稿いただいた。昨年、Townsend 先生は、先代 President である Richardson 先生の代わりに President-Elect として来日された。本年も横浜へ、現 President として来日され、日本支部年次総会での講演も予定されている。Townsend 先生は素晴らしい人格者で、本年の講演も楽しみである。

水田先生からは、「ACS Honorary Fellowship をいただいて」と題したご寄稿をいただいた。水田先生は本邦での女性外科医の草分けの存在であり、英国への留学後、世界で活躍された実績が評価されたものとする。本邦でも女性外科医が徐々に増えつつある中、水田先生に続く人材が育つことが期待される。

今回の外科学会定期学術集会会頭である桑野先生からは、「医療安全そして考える外科学」という題で、今回の学術集会の抱負を述べていただいた。ACS と日本外科学会との関係は、exchange program などを通して長く続いており、今後ともより進化した交流が望まれる。

矢永先生には Japan Chapter の Governor としての再任のご挨拶をいただいた。今後も Governor としてだけでなく、International Relation Committee のメンバーとしてのさらなるご尽力をお願いする次第である。

黒部先生からは、New Fellow としての抱負を書いていただいた。Convocation での感激を胸に、今後も是非、米国の外科学の良い点を

学んで欲しい。

現在、米国で心臓外科の臨床に携わっている金子先生と香川先生からもご寄稿いただいた。金子先生からは、米国の外科レジデント制度について、詳細に紹介していただいた。香川先生からは、心臓外科における fellowship の経験を述べていただいた。我が国でも二階建ての専門医制度が開始されたが、今後、様々な改善が求められることが予想される中で、時宜を得たものとなった。言葉、習慣、医療制度の違い、あるいは厳しい競争を乗り越えつつ米国でポジションを得ることは容易なことではないが、若い日本人外科医のさらなる活躍を願ってやまない。

内視鏡手術などのイノベーションが一段落した感がある昨今、外科学のメインテーマは、質の向上や教育に移りつつある。この分野での ACS が主導する Quality Programs、Education、さらには Advocacy には、一日の長がある。今後は、これらの分野で米国医学の優れた面を取り入れることが、我が国の外科学の進化には欠かせないと思う。日本の外科学が「ガラパゴス」を脱し、世界をリードする役割を担うには、引き続き、アメリカンスタンダードを参考にする必要があると思う今日この頃である。

ACS 日本支部事務局 吉田和彦

〒125-8506 東京都葛飾区青戸6-41-2 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター
TEL.03-3603-2111 FAX.03-3838-9945 e-mail:kaz-yoshida@jikei.ac.jp

New Fellows

新入会員名簿

Tadashi Uwagawa	宇和川 匡 (学校法人慈恵大学東京慈恵会医科大学附属病院 肝胆膵外科)	Masafumi Kuramoto	倉本 正文 (独立行政法人地域医療機能推進機構熊本総合病院 外科)
Emiko Kono	河野 恵美子 (日本赤十字社高槻赤十字病院 消化器外科)	Takeshi Gocho	後町 武志 (東京慈恵会医科大学 肝胆膵外科)
Takehisa Ueno	上野 豪久 (国立大学法人大阪大学医学部附属病院)	Mamoru Uemura	植村 守 (独立行政法人国立病院機構大阪医療センター 外科)
Mitsunaga Narushima	成島 三長 (国立大学法人東京大学医学部附属病院 形成外科・美容外科)	Yukiyasu Okamura	岡村 行泰 (静岡県立静岡がんセンター 肝・胆・膵外科)
Hideko Yamauchi	山内 英子 (学校法人聖路加国際大学聖路加国際病院 乳腺外科)	Toshihiko Hirata	平田 稔彦 (日本赤十字社熊本赤十字病院 外科)
Norikatsu Miyoshi	三吉 範克 (地方独立行政法人大阪府立病院機構大阪府立成人病センター 消化器外科)	Shigeru Tsunoda	角田 茂 (国立大学法人京都大学医学部附属病院 消化管外科)
Shimpei Ono	小野 真平 (一般財団法人温知会会津中央病院 形成外科)	Shinjiro Tomiyasu	富安 真二郎 (独立行政法人労働者健康安全機構熊本労災病院 外科)
Toshihiro Nakao	中尾 寿宏 (徳島県立中央病院 外科)	Takehiro Noji	野路 武寛 (国立大学法人北海道大学病院 消化器外科Ⅱ)
Keigo Yada	矢田 圭吾 (国立大学法人徳島大学病院 小児外科・小児内視鏡外科)	Yo Kurashima	倉島 庸 (国立大学法人北海道大学病院 消化器外科Ⅱ)
Chie Takasu	高須 千絵 (国立大学法人徳島大学病院 消化器・移植外科)	Jiro Nasu	那須 二郎 (国家公務員共済組合連合会熊本中央病院 外科)
Masaaki Nishi	西 正暁 (国立大学法人徳島大学病院 消化器・移植外科)	Satoshi Ieiri	家入 里志 (国立大学法人鹿児島大学病院 小児外科)
Masafumi Nakamura	中村 雅史 (国立大学法人九州大学病院 臨床・腫瘍外科学)	Yu Imamura	今村 裕 (国立大学法人九州大学病院 消化管外科(2)、肝臓・脾臓・門脈・肝臓移植外科)
Shinji Uchida	内田 信治 (学校法人久留米大学久留米大学医学部 外科学(肝・胆・膵外科))	Satoshi Hirano	平野 聡 (国立大学法人北海道大学医学部 消化器外科学Ⅱ)
Tsutomu Kawaguchi	川口 耕 (京都府立大学法人京都府立医科大学附属病院 消化器外科)	Yasuharu Onishi	大西 康晴 (国立大学法人名古屋大学医学部附属病院 移植外科)
Goichi Nakayama	中山 剛一 (学校法人久留米大学久留米大学医学部 外科学(肝・胆・膵外科))	Hirohisa Okabe	岡部 弘尚 (国立大学法人九州大学病院 消化管外科(2)、肝臓・脾臓・門脈・肝臓移植外科)
Tomohide Hori	堀 智英 (国立大学法人京都大学医学部附属病院 肝胆膵・移植外科)	Yukiharu Hiyoshi	日吉 幸晴 (公益財団法人がん研究会明病院 消化器センター)
Shinya Okumura	奥村 晋也 (国立大学法人京都大学医学部附属病院 肝胆膵・移植外科)	Satoshi Ida	井田 智 (公益財団法人がん研究会明病院 消化器センター)
Masashi Kurobe	黒部 仁 (川口市立医療センター 外科)		